

神の鳥

ライチョウ

をまもる

ために



人里離れた高い山の上に住むライチョウ。日本では古くから「神の鳥」として大切に守られてきました。しかし近年、急速にその数が減少してきています。そこで、上野動物園をはじめ国内のいろいろな機関が協力して数を増やす取り組みを進めています。皆さん、ライチョウを見たこの機会に、その保護についてぜひ考えてみてください。



恩賜上野動物園

ライチョウはどこにすんでいるの？

ライチョウ (*Lagopus muta*) はキジ目キジ科の鳥で、北半球の寒冷地に生息しています。日本産のライチョウは、そのなかで最も南に分布する亜種で、本州中央部の標高 2000m 以上の高山でくらしています。気温の下がった氷河期に日本まで南下したものが、氷河期の終了後も高山帯にのみ細々と生き残ってきたと考えられています。



羽の色が変わるよ

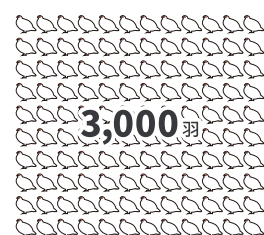


高山の冬は深い雪におおわれる一方、夏には雪がとけて高山植物が茂ります。そのなかで天敵から身を隠すため、ライチョウは季節によって羽の色が変わります。繁殖期の夏、オスは鮮やかな白黒になり、目の上の赤い肉冠が目立ちます。

どれくらい数が少なくなっているの？

日本産のライチョウは、右図のとおり大きく減少しています。過去には登山者によるゴミなどの問題がありました。最近では地球温暖化の影響により、餌となる高山植物が減少したほか、これまでいなかったキツネ、カラス、ニホンジカ、ニホンザルなどが高山帯に進出してきました。シカは高山植物を食べてしまいますし、キツネやカラスは直接ライチョウを捕食します。また高山の気温が上昇すると、感染症の危険性も増します。ライチョウは1955年に特別天然記念物に指定されたほか、環境省レッ

ドリストでも2012年に絶滅危惧Ⅱ類（危急種）からⅠB類（絶滅危惧種）にランクアップされています。



1980年代



2000年代

ライチョウを脅かすさまざまな要因

温暖化による植生の変化



イネ科植物が繁茂する火打山

マナーを守らない登山客

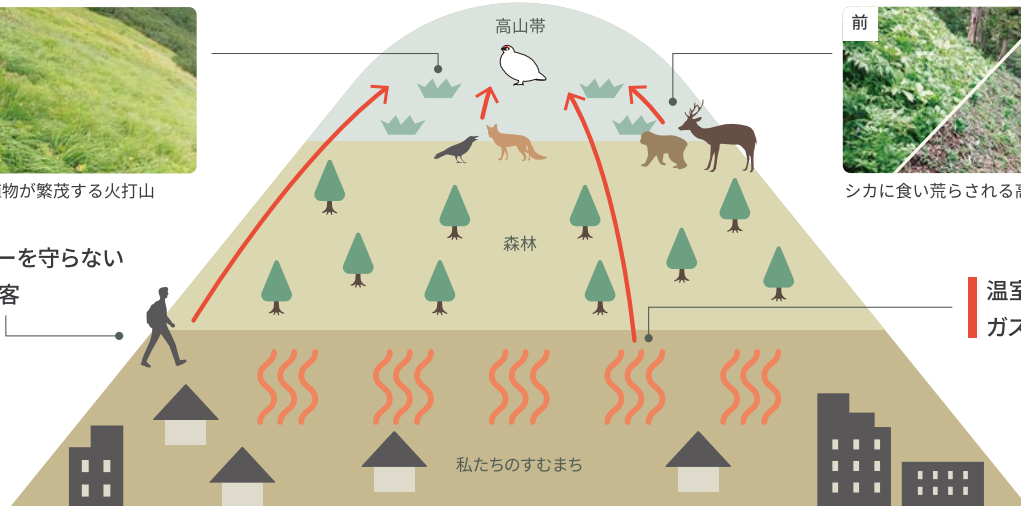


他の動物の進出



シカに食い荒らされる高山植物

温室効果ガスの排出



写真：環境省提供

日本産ライチョウとスバルバルライチョウ

ライチョウには、地域ごとに 20 以上の「亜種」があります。もっとも南に生息する日本産ライチョウは体つきも小型ですが、最北端のノルウェー北部にすむスバル



スバルバルライチョウ



日本産ライチョウ

バルライチョウは最も大型です。

上野動物園では、ノルウェーのトロムソ大学の協力を得て、2008年からスバルバルライチョウの飼育を始めました。スバルバルライチョウを用いて飼育や繁殖について研究し、日本産ライチョウの保護に応用しようという計画です。トロムソ大学から譲り受けたスバルバルライチョウの卵は上野動物園で孵化・成長し、次世代の繁殖にも成功。国内の他の動物園にも移動させ、複数の動物園で日本産ライチョウの保護に向けた準備が整いました。

動物園で希少種をまもる

絶滅の危険がある動物を守るためには、その種が野生でくらしている場所で保護する方法（生息域内保全）と、それ以外の場所で飼育して保護する方法（生息域外保全）があります。生息域外保全では、動物園が大きな役割を果たします。たとえばトキやニホンコウノトリでは、国内ではいったん絶滅してしまいましたが、中国から導入したものを動物園で繁殖させて数を増やし、今では野生への再導入に成功しています。

動物園で飼育・繁殖技術を確認する方法のひとつに、近

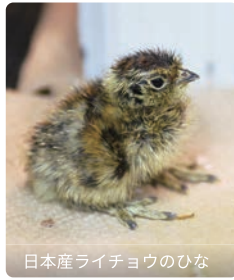
縁種の利用があります。ライチョウ以外の例として、東京都の動物園では日本のトキの保護を目的に、1970年代から世界各地のトキ類を飼育し、トキ類専用の飼料を開発しました。今では佐渡のトキ保護センターをはじめ全国各地の動物園で使われています。

繁殖や研究とならぶ、動物園のもう一つの重要な役割は、その動物の現状を広く人々に伝えることです。多くの人が絶滅の危険性について理解すれば、それは保護に向けた大きな一歩となります。

日本産ライチョウを動物園で



人間からの感染を防ぐための完全防備



日本産ライチョウのひな

日本産ライチョウを保全するため、環境省・文部科学省・農林水産省は2012年にライチョウ保護増殖計画をスタートし、(公社)日本動物園水族館協会と連携して生息

域外でのライチョウ飼育繁殖事業を開始しました。

ライチョウのメスは、巣にある卵を敵にとられると“産み足し”をします。そこで野生のライチョウに影響の少ない方法として、長野・岐阜の県境にある乗鞍岳でライチョウの巣から少しずつ卵を採取しました。また高山にすむライチョウは、細菌や寄生虫への抵抗力が弱いため、感染症の予防として専用の施設で防護服を着て飼育しています。このように様々な工夫を重ね、2018年12月末現在、国内5施設で、飼育下第2世代を含め29羽を飼育するまでに至りました。

見て、知って、まもう

野生のライチョウを保護するためには、できるだけ多くの人がライチョウの直面する問題について知り、ライチョウを守るための行動を起こすことが重要です。動物園でライチョウをご覧になったこの機会に、ライチョウのために何ができるか、具体的に考えていただければ幸いです。



登山や観光で山に行き、野生のライチョウを見た時は、決して追いかけたり騒いだりせず、静かに見守りましょう。



秋羽のつがい 東邦大学 小林篤氏提供

Japanese Rock Ptarmigan (*Lagopus muta japonica*) live in the alpine area (altitude range: 2000-3000m) in mainland Japan and they are distributed in the southernmost area among all the subspecies. The birds are designated as a “Japanese special natural monument”, and stated as endangered bird under the Ministry of the Environment of Japan (MOE) Red List. The current population is estimated to be about 1700 individuals, and it is getting smaller every year. Researchers suspect the decline is due to invasions of lowland species in their original habitats. Global warming is considered a factor as well.

Japanese Association of Zoos and Aquariums (JAZA) started a new captive management project in 2008 by keeping Svalbard rock ptarmigans initially as a simulation species. MOE established the national program of protection and reproduction of Japanese rock ptarmigan based on law and regulation in 2015. This program includes both in situ and ex situ action plans. JAZA carry it out the ex situ plan by the cooperation of plural facilities.

The 33 (m:20 f:13) birds currently grow and breed well in 5 institutions of JAZA (2018).